

モダリティ副詞「きっと」と「必ず」の使い分け

——アンケート調査に基づく男女差の考察——

張 静

1、はじめに

張(2015)は「キット」と「カナラズ」の使い方の差異について、100名の学生を対象にアンケートを集計して分析を行ったが、さらに対象者を社会人にも拡大し、二語の使い方において、男女差が認められるのではないかと仮説に基づいて分析したい。

2、先行研究

張(2015)では、「きっと」と「必ず」に関する先行研究を生かして主にモダリティの視点から各設問の分析を行い、最後にそれぞれの使い方を箇条書きで示した。また出典のやや古い設問文には二語の使い方の史的変遷も見られた。

「きっと」の使い方は以下の五つにまとめた。

- ① 推量の意味が含まれ、コトに対する話し手自らの推論に高い確信度や期待を示す。
- ② 希望や願望を表したい場合は「きっと」を用いる。
- ③ 文末の共起形式ナイ（否定形）の場合に使用できる。
- ④ パーソナルな場合によく使われる。
- ⑤ 曖昧な不確定な事柄また変わり得る余地がある場合に使いやすい。

「必ず」の使い方は以下の六つにまとめた。

- ① 共起形式ナイ（否定形）の場合に使用しないが、手順・規則を伝達する場合は例外。
- ② 繰り返して実現される確率が高い過去の習慣を表す。
- ③ パブリックな側面を持ち、「必ず」を使用して信頼性を示す。
- ④ 話し言葉に多い「きっと」とは対照的に「必ず」は書き言葉として使いやすい。
- ⑤ 聞き手に強い気持ちの依頼・命令を伝える。
- ⑥ 普遍的な事実を述べる。

そのほかの男女差の先行研究については、中村(2003)は、「人称代名詞」「人間(役職)名詞」「動物・事情名詞」「動詞(行為者)」「形容詞」の全体像に隠れている性差を明示して論じている。また、「男性が断定的な直言をするのに対して、女性は自信が弱いため曖昧でためらいがちに発言をしやすい」とされる。

井出(1983)によれば、女性には丁寧に話すことが求められ、それにはフォーマリティの高

い言葉を使うとされる。言語上の特徴としては、今まですでに多く研究されていた、です／ます体、敬語、接頭辞、文末表現に用いられる終助詞などをあげている。さらに、対人場面など、場面に依存して言葉の男女差が生じるとしている。

井出（1982）は「男は逸脱、女は正統を尊重」について、「規範にとわられず、逸脱を好み、逞しく振舞うことに価値を認める男は、非標準的な表現をより多く使い、俗語・卑語、きたない感嘆詞もよく使う傾向にある。また冗談を言ったり議論をする言葉の自由を持っている。一方、正統で権威のあるものを尊重する女は、標準形をより多く使い、上品で格式のある言葉使いである敬語をよく使う」と述べている。

3、アンケート調査

本報告では、より客観的なデータを収集するため、幅広い年代に対してアンケート調査を実施した。324名のアンケート回答者の中から有効回答の307名分を集計した。年齢・性別・出身地のいずれが無記入のものは無効回答とした。出身地は日本に絞って、日本語母語話者のみを対象とした。集計結果は男女で10ポイント以上の差異が出てきた文を対象として検討する。アンケート回答者の内訳は以下の通りである。

表1. 性別の内訳

男	女	合計
121	186	307

表2. 職業の内訳

学生	社会人	合計
194	113	307

表3. 年齢別の内訳

10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上	合計
106	98	28	28	20	19	18	307

表4. 出身地の内訳（合計：307名）

山口	広島	福岡	岡山	熊本	島根	長崎	静岡	兵庫	愛知
102	56	24	18	15	12	11	9	8	5
大分	大阪	佐賀	三重	宮崎	愛媛	徳島	香川	鳥取	京都
5	5	5	4	3	3	3	3	3	2
長野	宮城	埼玉	滋賀	福井	石川	青森	沖縄	東京	北海道
2	1	1	1	1	1	1	1	1	1

山口県出身者が一番多く、広島県、福岡県、岡山県と続く。本調査では、地域の偏りがあるため、地域差の検討は行わない。（アンケート用紙は、別添資料1参照）

4、仮説

中村（2003）の先行研究を基に以下の仮説を立て「きっと」と「必ず」の回答結果の男女差を考察する。

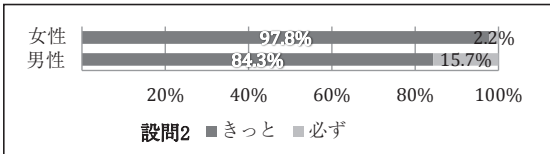
「きっと」の選択項目の中では、女性が多く選択し、「必ず」の選択項目の中では、男性が多く選択する。

5、アンケート集計結果と考察

男女差があると考えられる例文は以下の七つある。原文が使われている語は表の中に○で示してある。以下の設問2、3、4、12、14は村上春樹『1Q84』から引用された文であり、設問10、15は夏目漱石『こころ』から引用された文である。

設問2. (きっと／必ず) 構わないよね。

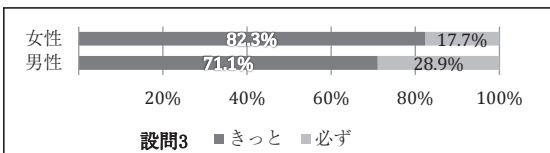
選択項目	性別	選択人数	選択率 (%)
きっと○	女性	182	97.8
	男性	102	84.3
差異		80	13.5
必ず	女性	4	2.2
	男性	19	15.7
差異		15	13.5



設問2はバーのシェフ(男)から主人公である青豆(女)と青豆がバーで親しい友人となったあゆみ(女)に対する発話文である。原文の「きっと」が支持されたが、中でも女性が男性より13.5ポイント多く選択している。逆に、「必ず」の方では、男性が女性より13.5ポイント多く選択している。ゆえに、仮説が支持された設問文になる。

設問3. 大丈夫、(きっと／必ず) お父さんには聞こえています。

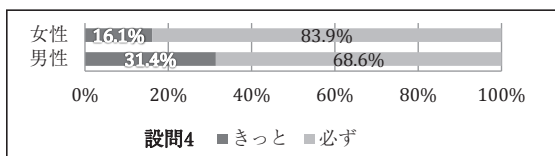
選択項目	性別	選択人数	選択率 (%)
きっと○	女性	153	82.3
	男性	86	71.1
差異		67	11.2
必ず	女性	33	17.7
	男性	35	28.9
差異		2	11.2



設問3では、息子の天吾（男）は病院で深い昏睡状態にある父親に語りかけ、田村看護婦（女）が天吾を励ますために発した発話文である。原文の「きっと」が支持されたが、その中でも女性が男性より11.2ポイント多く選択しており、逆に「必ず」の方では、男性が女性より11.2ポイント多く選択している。よって、仮説が支持された設問文になる。

設問4. もし来られないような事情が生じれば、彼女は（きっと／必ず）前もって電話をかけたきた。

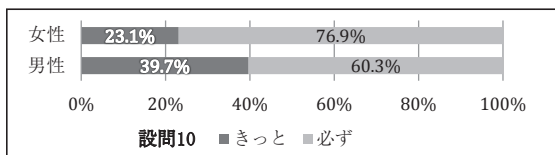
選択項目	性別	選択人数	選択率 (%)
きっと	女性	30	16.1
	男性	38	31.4
差異		8	15.3
必ず○	女性	156	83.9
	男性	83	68.6
差異		73	15.3



設問4は天吾（男）の年上のガールフレンドが連絡せず、いつもの金曜日なのに天吾の部屋を訪れなかったことから天吾が思った事柄である。原文の「必ず」が支持されたが、その中で女性の方が男性より15.3ポイント多く選択しており、逆に「きっと」の方では男性のほうが女性より15.3ポイント多く選択している。よって、仮説が支持されなかった設問文になる。

設問10. 秋が去って、冬が来て、その冬が尽きても、（きっと／必ず）会うつもりでしたのです。

選択項目	性別	選択人数	選択率 (%)
きっと○	女性	43	23.1
	男性	48	39.7
差異		5	16.6
必ず	女性	143	76.9
	男性	73	60.3
差異		70	16.6

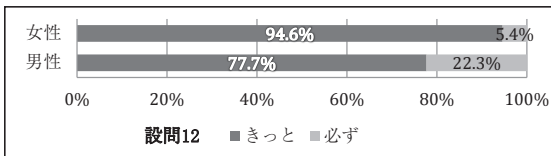


設問10は夏目漱石（1914）の『こころ』の下「先生と遺書」の第55章から引用された文であ

る。原文の「きっと」は支持されず「必ず」が多く選択された。「必ず」の中でも、女性が男性より16.6ポイント多く選択しており、逆に「きっと」のなかでは、男性が女性より16.6ポイント多く選択している。よって、この設問では仮説が支持されなかった設問文になる。

設問12. そういうのは（きっと／必ず）生まれつきのものなのだろう。

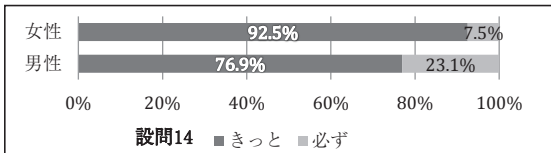
選択項目	性別	選択人数	選択率 (%)
きっと○	女性	176	94.6
	男性	94	77.7
差異		82	16.9
必ず	女性	10	5.4
	男性	27	22.3
差異		17	16.9



設問12は村上春樹（2009）の『1Q84』（BOOK1）の第6章から引用された文である。主人公である天吾（男）が何か質問されれば、律儀に何かしらの答えは返すというのが生まれつきのものだとする地の文である。原文の「きっと」が支持されたが、その中でも女性が男性より16.9ポイント多く選択している。逆に、「必ず」の方では、男性が女性より16.9ポイント多く選択しており、仮説が支持された設問文になる。

設問14. （きっと／必ず）会見の結果を聞きたがっているに違いない。

選択項目	性別	選択人数	選択率 (%)
きっと○	女性	172	92.5
	男性	93	76.9
差異		79	15.6
必ず	女性	14	7.5
	男性	28	23.1
差異		14	15.6

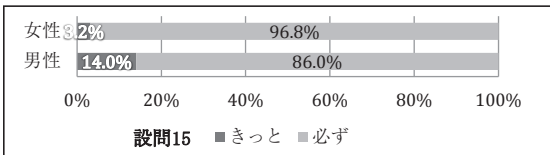


設問14では、天吾（男）が会見の結果を知りたがっている小松（男）に電話をかけようとする場面である。原文の「きっと」が支持されたが、その中でも女性が男性より15.6ポイント多

く選択しており、逆に「必ず」の方は、男性が女性より15.6ポイント多く選択している。よって、仮説が支持された設問文になる。

設問15. 先生は月に一度ずつは（きつと／必ず）この木の下を通るのであった。

選択項目	性別	選択人数	選択率 (%)
きつと	女性	6	3.2
	男性	17	14.0
差異		11	10.8
必ず○	女性	180	96.8
	男性	104	86.0
差異		76	10.8



問15は夏目漱石（1914）の『こころ』の上「先生と私」の第5章から引用された文である。原文の「必ず」が支持されたが、その中で女性の方が男性より10.8ポイント多く選択しており、逆に「きつと」の方では、男性の方が女性より10.8ポイント多く選択している。よって、仮説が支持されなかった設問文になる。

6、まとめ

本調査報告では、全21項目のアンケートの設問のうち男女差が10ポイント以上の七つの設問文を検討対象とした。集計結果から見ると、設問2、3、12、14の4項目では、仮説「『きつと』の選択項目の中では、女性が多く選択し、『必ず』の選択項目の中では、男性が多く選択する」が支持された。しかし、設問4、10、15の3項目では仮説が支持されなかった。支持・不支持は4対3であり、本仮説を一般化することはできない。つまり、「きつと」と「必ず」の使い分けとしては、女性が自信が弱いため曖昧でためらいがちな「きつと」を多く用い、男性が断定的な直言の「必ず」を多く用いるというようなステレオタイプの法的規則性は証明できなかったことになる。

また、発話者と受話者または登場人物の役割関係による男女間の差異も見られなかった。

ちなみに、七つの設問の元となった作中人物の男女差としては、「きつと」を男性が4回、女性が1回使用しており、「必ず」の方は、男性が2回使用している。この点からも本仮説を一般化することはできない。

ただし、次の表6-1に示すように「きつと」と「必ず」のどちらが優勢群であるかに関わらず、「きつと」と「必ず」のそれぞれの選択肢に関してみれば、7項目全てにおいて、男性間の差異よりも女性間の差異の方が多ことが判明した。

表6-1. 男女差における男女言葉使いの自由度の考察 (原文が使う語は○で示す)

設問番号	設問文 (発話者→受話者)	優勢群	男性間の差異	関係	女性間の差異
2	(○きつと／必ず) 構わないよね。(男→女)	きつと	68.6	<	95.6
3	大丈夫、(○きつと／必ず) お父さんには聞こえています。(女→男)	きつと	42.2	<	64.6
4	もし来られないような事情が生じれば、彼女は(きつと／○必ず) 前もって電話をかけてきた。(男)	必ず	37.2	<	67.8
10	秋が去って、冬が来て、その冬が尽きても、(○きつと／必ず) 会うつもりでいたのです。(男)	必ず	20.6	<	53.8
12	そういうのは(○きつと／必ず) 生まれつきのものなのだろう。(男)	きつと	55.4	<	89.2
14	(○きつと／必ず) 会見の結果を聞いたがっているに違いない。(男)	きつと	53.8	<	85.0
15	先生は月に一度ずつは(きつと／○必ず) この木の下を通るのであった。(男)	必ず	72.0	<	93.6

上記の表6-1から分かることは、「きつと」と「必ず」の使い分けの男女差というより、「きつと」と「必ず」の言葉の選択において男性の方が、いずれの語を用いるか、個人によって異なり、自由度が高く、女性においては個人差が少なく、語の選択の自由度が低いということである。

つまり、女性は言語選択において感受性が鋭く、共感性も高いことから「きつと」と「必ず」の使い分けにおいても過半数以上がどちらかに傾く傾向がある。特に、設問2と設問15では、女性間の「きつと」と「必ず」の言葉の選択において9割以上の差異となっている。

さらに、表6-1に示したように作品が発表された時代と関係なく七つの設問文全てにおいて女性間の差異は男性間の差異より高い。井出(1982)の「男は逸脱、女は正統を尊重」の説を支持していると言える。

6、今後の課題

今後の課題としては、男女の言葉の使い分けの感受性の差異、フォーマルとパブリックの場面による男女差、上下関係などによる差異などを調査し、検討する必要がある。

【例文出典】

有島武郎(1913)『或る女』岩波書店／茅野直子・秋元美晴・真田一司(1987)『外国人のための日本語 例文・問題シリーズ1「副詞」』荒竹出版／獅子文六(1952)『自由学校』『獅子文六作品集<第1巻>』文藝春秋新社／太宰治(1988)『風の便り』『太宰治全集4』ちくま文庫、筑摩書房／夏目漱石(1914)『こころ』岩波書店／村上春樹(2009)『1Q84 (BOOK1)』株式会社新潮社／于春池(2002)『日本句型辞書』外語教学与研究出版社

(注) 夏目漱石の『こころ』は1914年4月より朝日新聞に連載され8月に完結し、同年10月に岩波書店より出版された。本稿では1952年発行され1984年改訂された新潮文庫版を用いた。

【参考文献】

井出祥子(1982)「第4章 待遇表現と男女差の比較」『日英語比較講座 第5巻 文化と社会』大修館書店

井出(1983)「女性の話し言葉」水谷修編『話し言葉の表現』筑摩書房

張静(2015)「モダリティ副詞についてのアンケート調査—『きっと』と『必ず』の使い方の差異」山口大学人文学部国語国文学会 『山口国文』第38号 pp.58-72

中村平治(2003)「表現に探る性差」『福岡大学研究部論文集. A, 人文科学編』pp.1-18

(ちょう・せい)

別添資料 1

「キット」と「カナラズ」に関するアンケート調査

以下の設問文を読み、あなたがより使いやすい方に○をおつけ下さい。

1. そうすれば（きっと／必ず）次につながります。
2. （きっと／必ず）構わないよね。
3. 大丈夫、（きっと／必ず）お父さんには聞こえています。
4. もし来られないような事情が生じれば、彼女は（きっと／必ず）前もって電話をかけてきた。
5. 私は客の帰った後で、（きっと／必ず）忘れずにその人の名を聞きました。
6. 君なら（きっと／必ず）好きになれる。
7. あすは（きっと／必ず）いらしてくださいませね。
8. この次の御手紙では、（きっと／必ず）その問題に触れてお答え下さい。
9. よろしい、（きっと／必ず）糾明しましょう。
10. 秋が去って、冬が来て、その冬が尽きても、（きっと／必ず）会うつもりでいたのです。
11. 「ものごとには（きっと／必ず）二つの側面がある」というのが彼の意見です。
12. そうというのは（きっと／必ず）生まれつきのものなのだろう。
13. 南アフリカ共和国に対する制裁法案は、（きっと／必ず）可決されるだろう。
14. （きっと／必ず）会見の結果を聞きたがっているに違いない。
15. 先生は月に一度ずつは（きっと／必ず）この木の下を通るのであった。
16. 学校の給食の前にも（きっと／必ず）お祈りをしなくてはならない。
17. 小松は（きっと／必ず）天吾のところに連絡してくるはずだ。
18. （きっと／必ず）仲の良い友達もできていたはずだ。
19. マガジンを抜くときには、（きっと／必ず）安全装置をかけておくこと。
20. ぶちのめしても、ぶちのめされても、俺は（きっと／必ず）彫刻刀を取り戻してやった。
21. ご招待ありがとうございます。（きっと／必ず）伺います。

上記のアンケートについては、お気づきの点やご意見などがありましたらお書き下さい。

国籍（ ） 出身地（ ） 都道府県 性別（男・女）

年齢（10代・20代・30代・40代・50代・60代・70代以上）

職業（学生・社会人）

ご協力ありがとうございました。